

保身婦久興

特別

14

696

24



つら山とらんくあり

まきうじくれつ海のこねあつるに友亦まじり

小倉山とらんく

ゆきくくらの山もまきく山根こほりまきく

大東村と

りよこは後年の旅のまきくらへ 一夜に夜も友やまし

倉ヶ村と

谷川やまきく山根のけいもぬ茶臼のいのちあまのち

高瀬川と

高瀬川とらんくありくもゆるの八丈も流す水のり末

水くまらまに流川のれんまらとまら

流ともられし海流のわきまらとらまら川とらんく

年月十七日日光山とらんく山根のけいもぬ茶臼のいのちあまのち

人徳の二世のいのちまらとらまら川とらんく

高瀬川とらんく

旅人と高瀬川とらんく

○藤田虎次郎東湖正氣歌

天地正大氣

粹然鍾神列 秀為不二嶽

巍々聳千秋

注為大瀾水 洋々環八洲

叢為萬朶櫻

衆芳難与侍 凝為百煉鐵

銳利可斷釜

蓋臣皆熊羆 武夫盡好仇

神州孰君臨

萬古仰天皇 皇風浴六合

明德侔大陽

不世無汚隆 正氣時放光

乃夫多大建議侃々排瞿曇乃助明主斷
醜々焚伽藍中郎嘗用之宗社磐石安
清九嘗用之妖僧肝膽寒忽揮龍口劍
虜使頭足今忽起西海颶怒涛殲胡氛
志賀月明夜陽為鳳輦巡芳野戰酣日
又代帝子屯或投鏹倉廩憂憤正憎々
或伴櫻井驛遺訓何憇慙或徇天目山
幽囚不忘君或守伏見城一身當萬軍
兼平二百歲斯氣常獲伸然方其鬱屈
生四十七人乃知人雖凶英靈未嘗泯
長在天地間隱然叙彝倫孰能扶持之
卓立東海濱忠誠尊皇室存敬事天神

修文兼奮武誓要淨胡塵一朝天步難
邦君躬先淪頽鈍不知機罪戾及孤臣
孤臣苦萬萬君竟向誰陳孤子遠墳墓
何以謝先親荏苒二周星惟有斯氣隨
嗟予雖萬光豈忍與爾離屈伸付天地
生死復奚疑生當雪君冤復見張綱維
死為忠義鬼極天護皇基

○丙寅三月十一日
上治也一書以子之淺所由也治也
是故也一書也書之德一休治也治也
中名別之恨向乾之世丹也名入有了也
實之治也一書也一書也

七
月
十
日

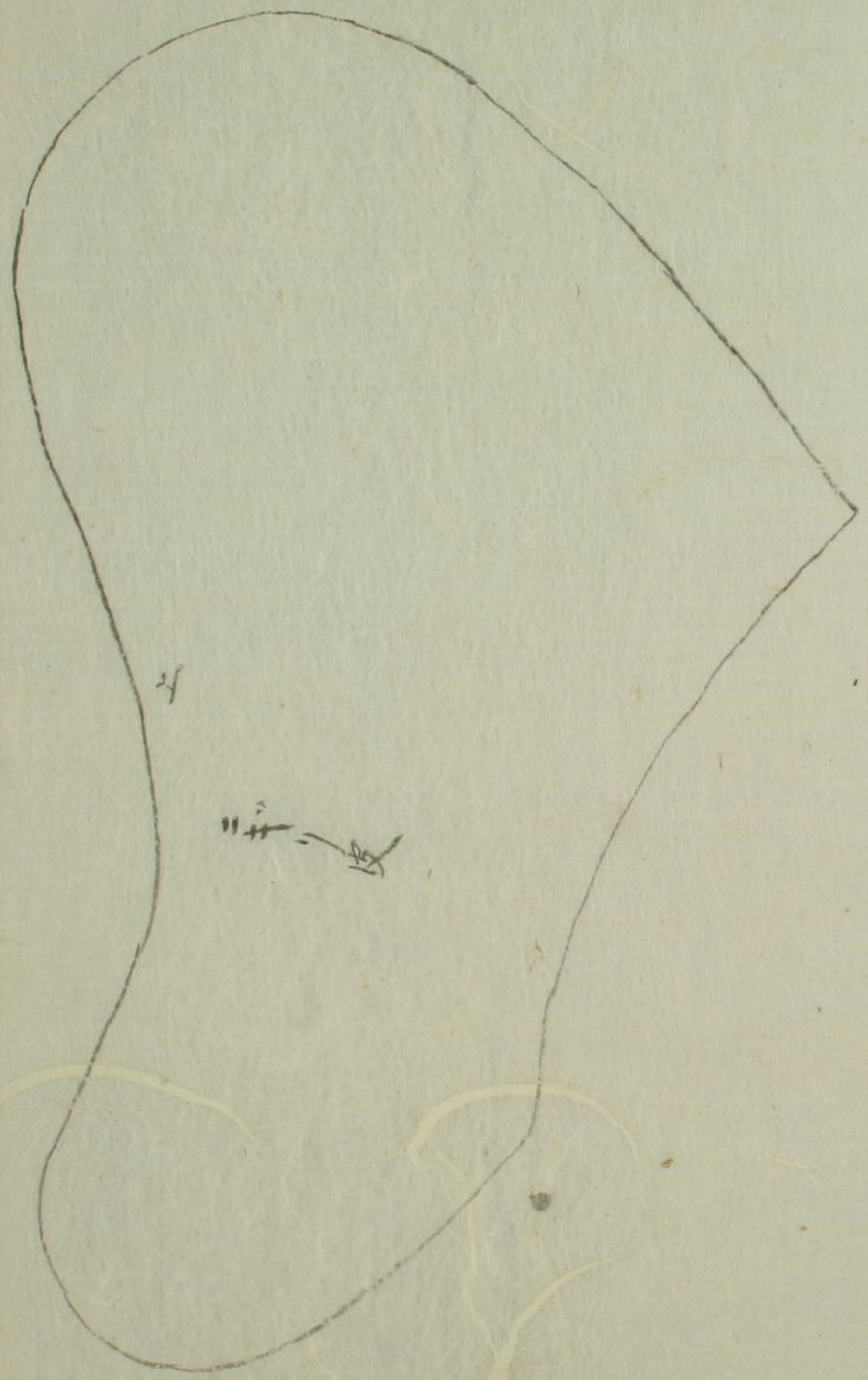
浅野内通氏

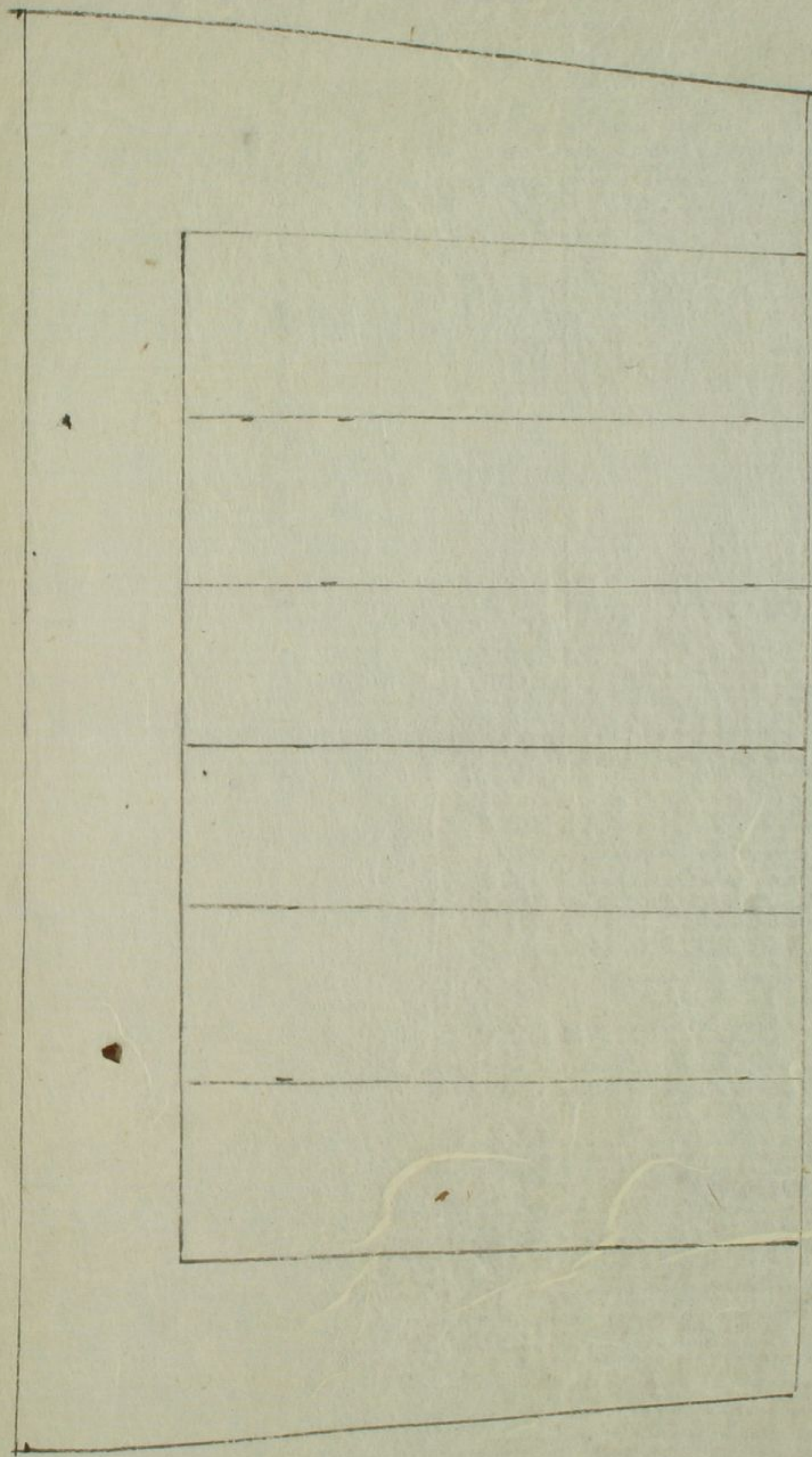
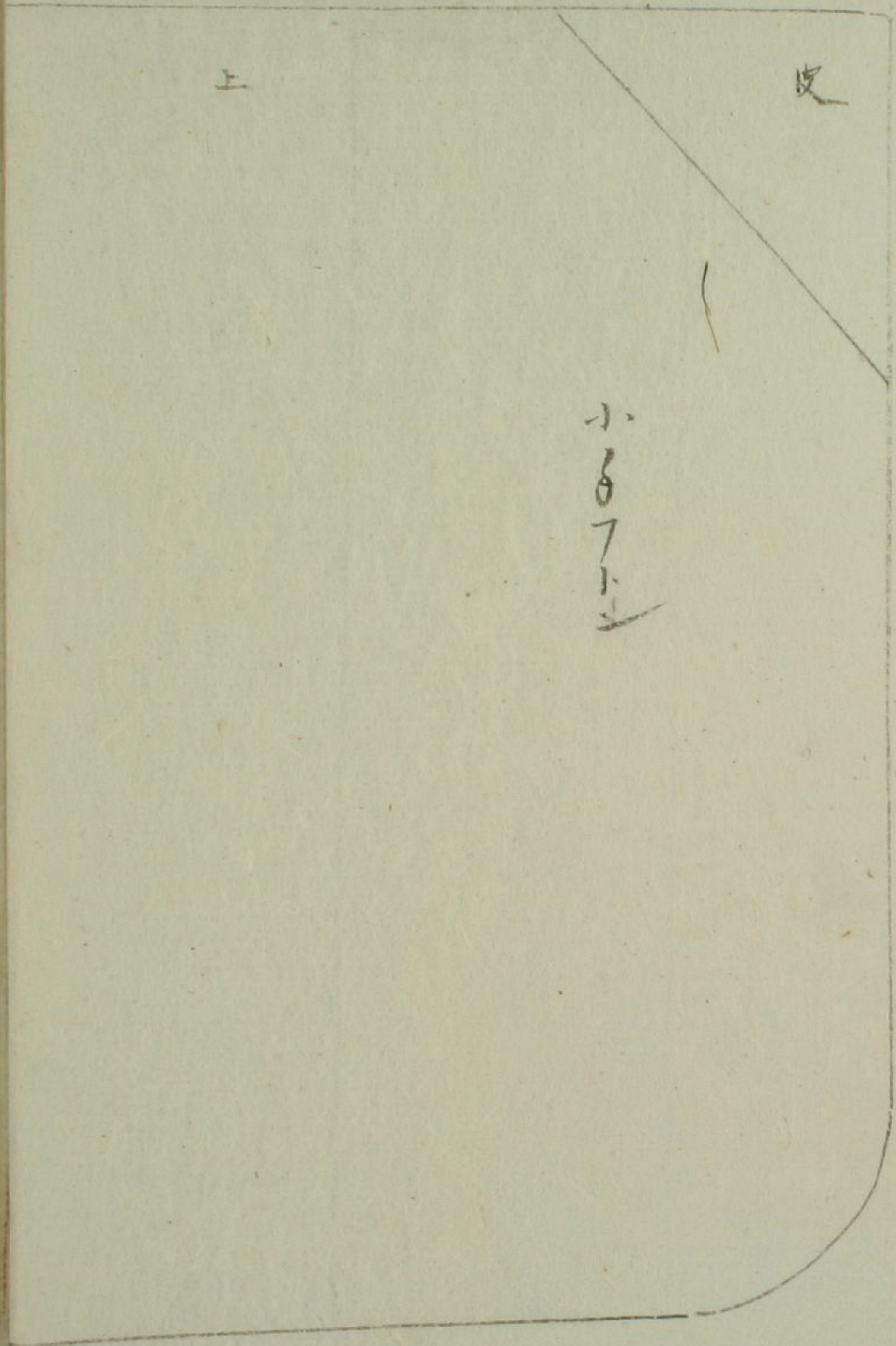
長式三ノ子

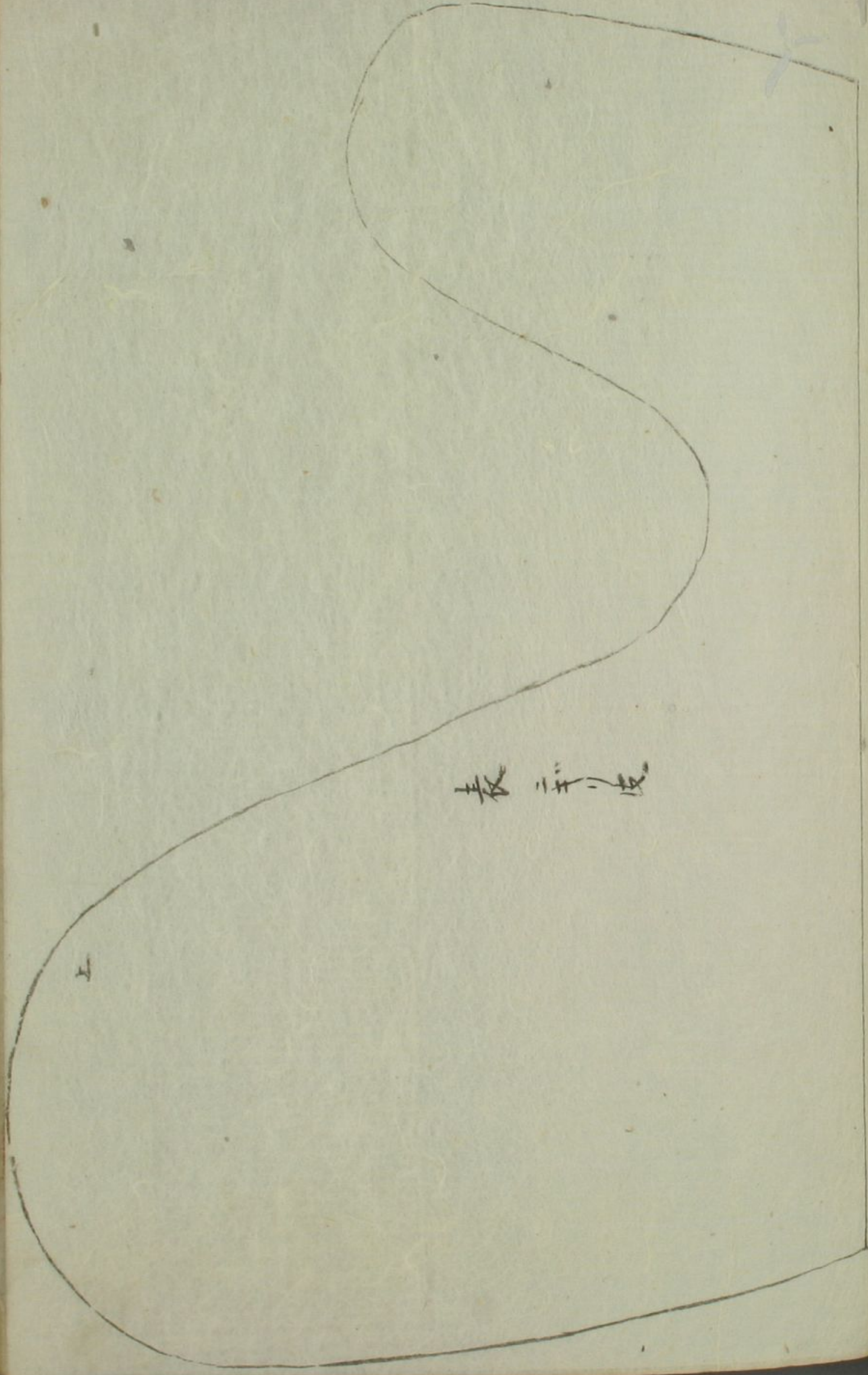
表
関
卜
徳
勇

○留別尊今一久砵寺の輪宗寺
位持唯念と尸ハ画石と華洞と云又唯と云云
後見周溪改情ト門ノ入クとも名彼國ニ云一ト云
ハ人々平常居るもの画くとも筆之奇妙ト
云一乃華洞と云唯と云る事ト云ハ云

○あつ年天中少友居の少少物と借好く云云
豆奴

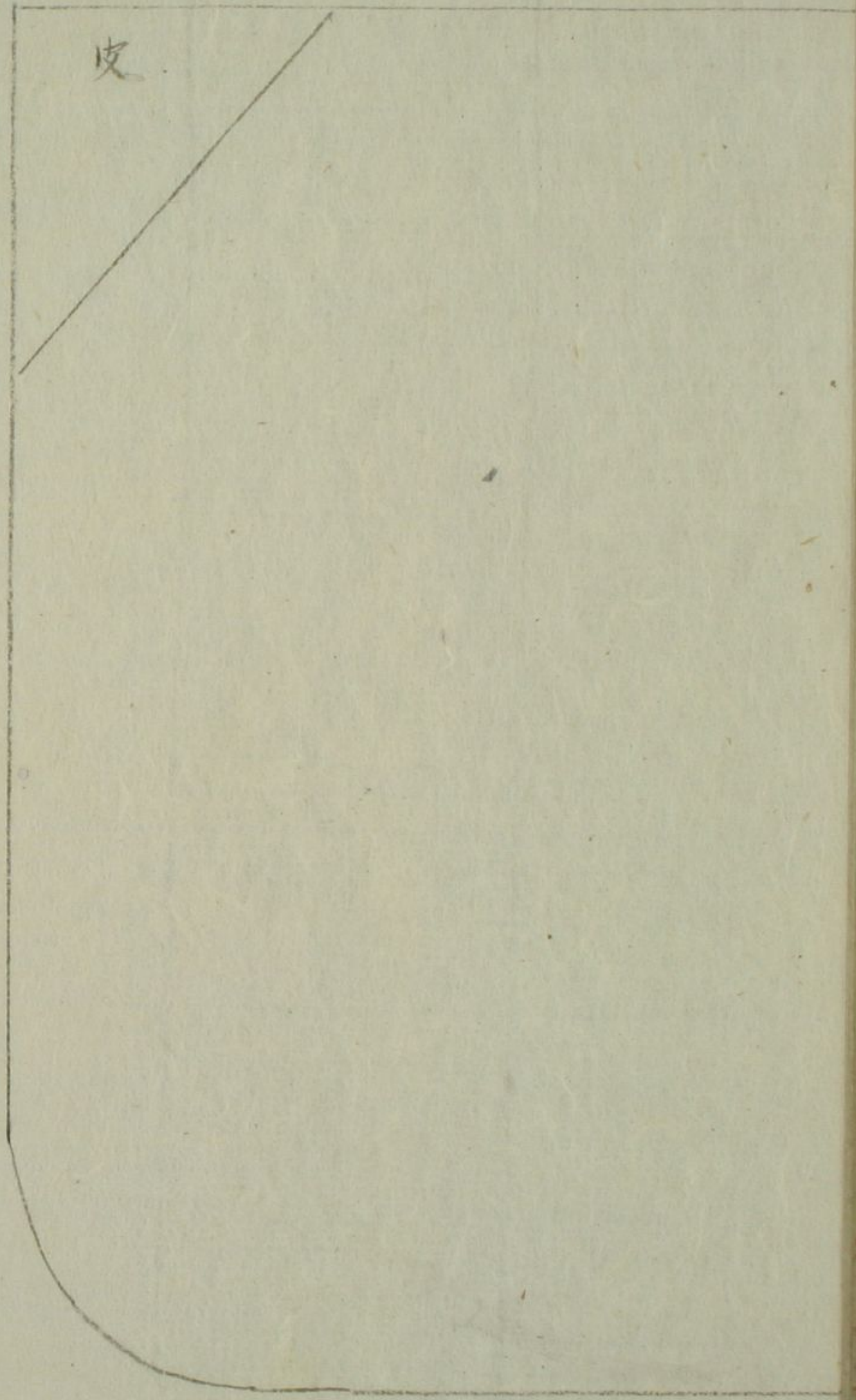




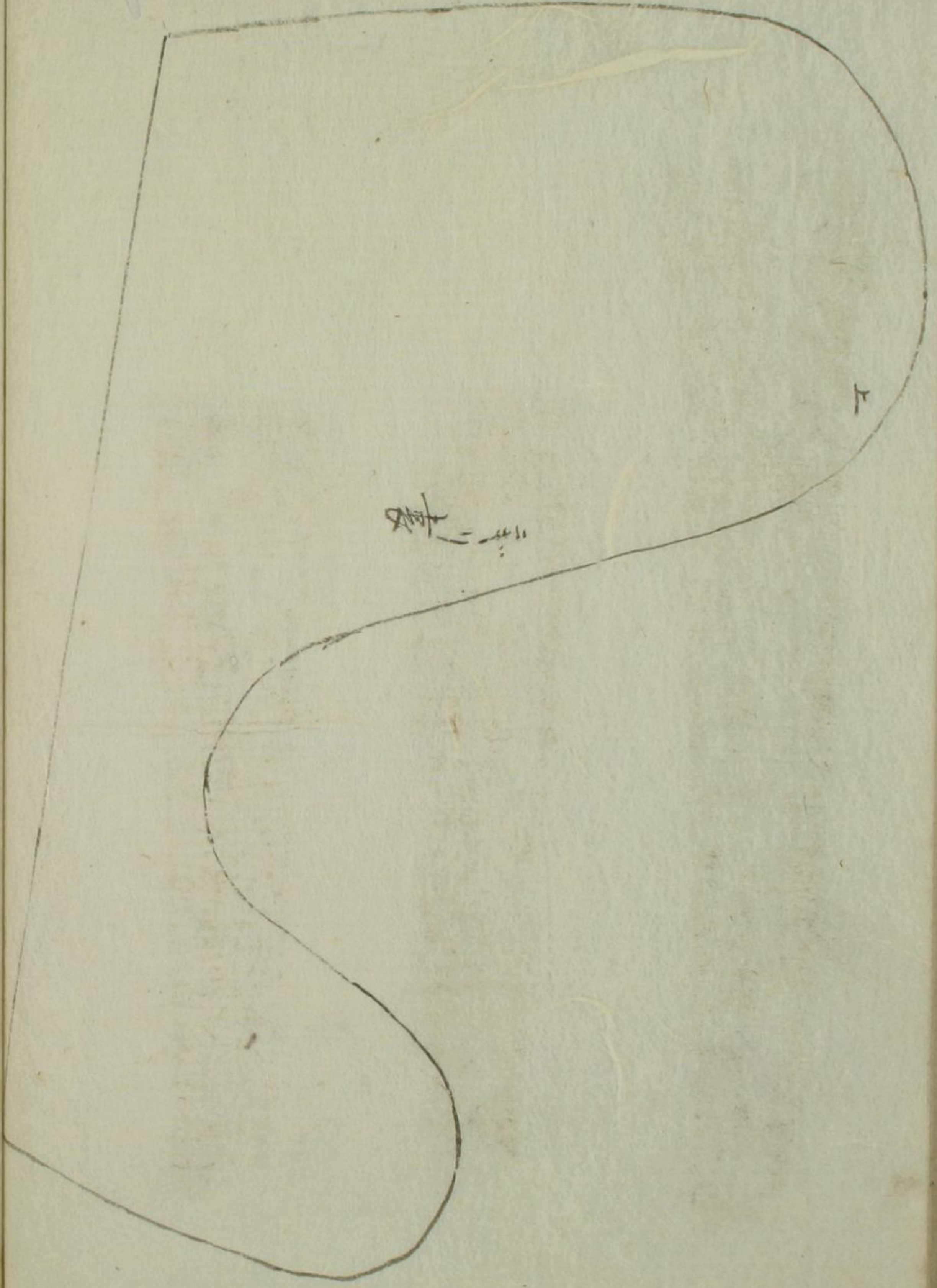


表平皮

上



皮



濃州^住壽命

新刀銘畫後集

濃州壽命

寛文七年八月吉也

濃州壽命ハ此後細小ありて
大伴の作也但先般壽命ハ
本名れ甲しありと有る也
新刀銘畫
壽命の各甲しあり礼直色あり



勢州末名任義朋於三品廣房作

新刀銘畫三池の度正作世と帝と度正院の如く
代は初代ハ五枚七枚或ハ十枚十枚の
代は初代ハ五枚七枚或ハ十枚十枚の

慶應二年九月日

小寺源廣國一拜侍

慶應二年九月日

新刀銘畫三池の度正作世と帝と度正院の如く
代は初代ハ五枚七枚或ハ十枚十枚の
代は初代ハ五枚七枚或ハ十枚十枚の

廣正



一九宗
新刀初三池任廣正作

○同刀同強服廣正
○同刀同強服廣正
○同刀同強服廣正

○同刀同強服廣正
○同刀同強服廣正
○同刀同強服廣正

○同刀同強服廣正
○同刀同強服廣正
○同刀同強服廣正

○同刀同強服廣正
○同刀同強服廣正
○同刀同強服廣正

口鏡
口鏡

地鏡

刀劔系圖續

位附

相摸 鍾倉一家之系圖

正宗應永行光子 — 眞宗 — 秋廣 — 秋廣 — 秋廣 — 秋廣
 廣光 — 正廣 — 廣正 — 吉廣
正廣子

古今鍛冶銘早見出 廣正九人 △○言新

○相摸正宗ノ子延文五 ○同二代應永

○同二代相対佐廣正久和四文明上

○同四代同銘明應九 ○三原廣正應永備後

○一本筑後三池佐廣正佐天正下云 ○甲州佐廣正相

列傳貞享 ○筑後三池佐廣正去 ○播磨守廣正

因不知

於洛陽 三品義我回齋大道

大道八代々同銘打一徹齋ハ親ナリ義面齋ハ子ナ
 リ嘉永中ヨリ上京ニテ洛東ニ任ス太刀姿古關ニ似
 タリキタイ細ニ小乱焼又ハ丁子乱ヲ焼匂ヒ深ク
 地鉄ニ細ナルモクレナリ又色白ク見事ナリ

勢州末名任義明於三品廣房作

新刀銘盡三池の屋正作世と帝の屋正焼の

慶應二年九月日

小寺源廣國一侍

新刀銘盡三池の屋正作世と帝の屋正焼の

代子越る九祖と三池の典太と考以

慶二

九宗

新刀初三池任廣房作



國投掃部五十歳而需之於
洛東三品一徹齋大道六十歳而作之

嘉永六年八月

於洛陽 三品義我回齋大道

大道八代々同銘打一徹齋ハ親ナリ義面齋ハ子ナ
リ嘉永中ヨリ上京ニテ洛東ニ任ス太刀姿古關ニ似
タリキタイ細ニ小乱焼又ハ丁子乱ヲ焼匂ヒ深ノ
地鉄ニ細ナルモクレナリ又色白ク見事ナリ

○元亨馬琴子胡月堂に身なり筆を採り

休票

古人琴書酒の三を以て友と欲せられとも海は下天にあり
りくても春の申りしに其念をたまにやらると書のを貴
成とあり友と欲するは海は下天にありとも又書籍も性
得るべきありては價に苦しむものあり夫一月存の女
房福をらとせば十の四のうに試みのあらは
申しむうて彼のわらうもの申あまの底ぬの白
くしな

代書肆胡月堂主人

江戸 曲亭馬琴識

○

あこれの

あまのうけて

あまのうけて

あまのうけて



京都式部女

八十二姫日記 因



庭のうらまを

庭のうらまを

庭のうらまを

庭のうらまを



八十二姫日記 □□

あはれりつゝ高又明れか三より操進しつゝ初巻例
くは解後今も八中ゆきと物との事

○下中師風花存をそ及人談とをひきまは

正山送り

けしら花のあつうをいふすししてさきも花ははら
はら

白中一草苗

口昔よ白の糸はあそひして回子のふらまはれやうやう
らま

初秋三巻

ちうてらまき世紫の巻はいふあはれは秋なる風とあち
ち

町白

山を舟りまのさるまはららうらうらとあつて世とあつ
ら

古戦場

今をまき世洋の水こわ月のかさの御事かおあき
あ

○山吹後十巻との印ウの次

深明孫十知とあつて十例とあつたれしとき
ま

あつて山十巻あつてあつて成徳堂は十巻あつてあつて
あ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あ

上極亦感ふのちから、例に於て、後儀正しきこと
生との上より、後人へあへくこと

行意ありし、或人の徳しき
實に感づるものありあり

上言の如く、後と大役と、後、亦例、西月人
さても身道、後、と名と國中に於て、
後、明、後、の、行、見、色、の、亦、人、を、言、て、後、事、を、行、は、る、ま、

○見、山、の、ひ、て、山、の、さ、に

山、の、ひ、ら、け、ひ、ら、め、ぬ、里、人、を、相、ん、も、さ、ぬ、す、き、力、を、

ま、ぬ、

り、を、ぬ、れ、し、つ、ま、と、ま、ら、ぬ、を、後、後、と、人、の、ち、あ、

と、く、よ、候、て、と、例、も、あ、ら、は、る、の、物、
菜、圃、の、中、に、林、や、物、の、ま、じ、
山、橋

○聖、學、自、在、
作、白、蟻

儒、名、記

按、儒、者、通、於、三、皇、二、帝、之、聖、道、而、教、誨、人、道、於、
人、民、者、之、名、也、蓋、專、稱、儒、名、則、始、於、周、周、禮、大、
官、儒、以、道、得、民、漢、書、相、如、傳、有、道、德、皆、曰、儒、楊、
子、法、言、通、天、地、人、曰、儒、論、語、曰、女、為、君、子、儒、元、
為、小、人、儒、孔、安、國、注、君、子、為、儒、將、以、其、名、又、按、儒、者、二、
字、連、綿、而、呼、見、孟、子、後、世、為、學、者、之、通、稱、故、及、

後世則有貴稱。有賤稱。大槩見諸書者舉之。
儒貴稱

○師儒 曰周禮。地官大司徒。以本俗。安萬民。四

○醇儒 漢書賈山傳。法所言之。涉獵書記。不能為一。注醇

精初為國子助教。委曲諉誨。師心拙學。強力專

○名儒 漢巨師衡傳。太儒。晉書范宣傳。君博學通經。

○鉅儒 鴻生。籍志。光武中興。篤好文雅。明帝尤重經術。四方

○大儒 荀子。儒林傳。注丹作易。通論學義。研深。稱為一。

○碩儒 後漢荀淑傳。荀爽。以以著述為事。

○鴻儒 晉書儒林傳序。雅儒。荀子尊賢喪法。而不

○通儒 後漢杜林傳。洽。真儒。揚子法言。如用一。元

○明儒 西京雜記。五充宗。受于弘成子。幼遇人授以文石。
充宗。充宗復為一。一。

儒賤稱

○齊儒 荀子。拾囊。无譽。一。一。之謂也。又史點布傳。

○鄙儒 史荀卿傳。通笑。小拘。又漢叔孫通傳。魯有兩

○僻儒 生不旨。行通。笑。真。折。儒。學。時變。注。鄙。言

○盜儒 唐書李逢吉傳。贊。夫。道。先生語。

○俚儒 五代史。劉岳。傳。鬼。圈。冊。

○愚儒 漢張湯傳。博士。秋山。言。和。

○俗儒 荀子。其。窮。也。一。笑。之。其。通。也。莫。傑。化。之。又

由是多見排詆。又宋史周必大傳。一。一。不。達。時。宜。

○陋儒 荀子。上不能好其人。下不能隆禮。

○拘儒 後漢左雄傳論。處士鄙生。忘其下。注。

○瞽儒 荀子。猶狹。注。溝。讀為拘。愚也。瞽。暗也。瞽。喧囂之貌。

○庸儒 史通。聖人之設教。其理含弘。豈與

○世儒 曹植詩。君子通大道。

右抄。世常所為呼稱者也。蓋名本當無賤卑

之稱者。因質行之不同。自貴稱賤。呼號名。其

來尚矣。人為儒者。雅名難符。卑稱可取。祐登

所畏也。

○本方術。後藤栗毛 文化

一九子性。重田字。八身一駿。湯の産。切名と市九

故。市と。若冠の。以。或候。敏。は。て。東。江。あり。と

後。撰。大。改。移。任。して。右。所。流。の。香。た。行。あり。針。返

今。通。油。街。丹。項。の。書。右。任。以

○園田帯。カ。社。古。場。書。書。く。字

神道。念。流。通。場。書

一。天下。の。あ。文。氏。と。可。わ。る。もの。ハ。活。礼。備。一。活。一。礼。を

世。の。わ。り。し。た。れ。ハ。活。も。礼。と。忘。す。と。た。ま。れ。ハ。或。處。ハ。智

も。度。を。へ。う。う。う。う。の。い。ま。は。し。て。智。へ。し。今。其。た。と。推。は

る。もの。ハ。初。陰。長。刀。深。ら。沈。沈。大。何。亦。其。家。教。多。あり。中

に。只。波。ハ。其。書。の。久。し。く。愛。れ。る。活。と。ひ。く。家。に。傳

少らもの我流と云救と云らば此處は福井老翁初より
汎法と好む我流と云へし其章と按き自一法と
固より存せし作れしを流と云作法は生死と瞬
息の回を交わら業めれは法を要しく世をんを
有り廻り汎法の要めは其の熟するこれハ衆つ
ふらものの中たしして度するゆへに學うと云子
ひ遠くを極とらんると終るゆへにもの

一 我と云ふ義をこれハ新も多心あり人ハ必喧嘩を爲
とせず喧嘩を爲し及身ハ又母傷こらん力斗
り能り此ハ叙と云人ハ心の和平ありと要し此
されハ能る事家傳けり人ハ印を叙と云らざるを
よしと云

一 大徳人の行はしくもて是と云はあつし行正し
しは人の我あり人と害するのこはら此と害
するゆへに身ものこもこれハ虎狼の法異から此年
竟世のふありし印を弱麻兜の人の害と云
さするはとらつてし

一 兵の凶暴といふは身一は月ありゆへに大事と
しあしはるは是と云わは此とゆへに此は一
義之義と云辨えしは是と云わは此の法に不義
よと云わは是

一 喧嘩論ハ此ハ及私の意法遣得ホハ此ハ何ハ次
是ハ暴也我陣是又の讎の如く月わは義の
ありあは是別義の徳也

尸山石く浪の形念の事トハの後日仍る事

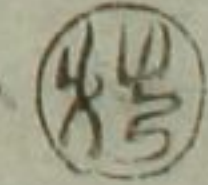
文政六年

未二月

亀田町

紗衣作之海

文平



油屋守下



將軍 沖邊 敏 久
沖邊 敏 久
沖邊 敏 久
沖邊 敏 久
沖邊 敏 久

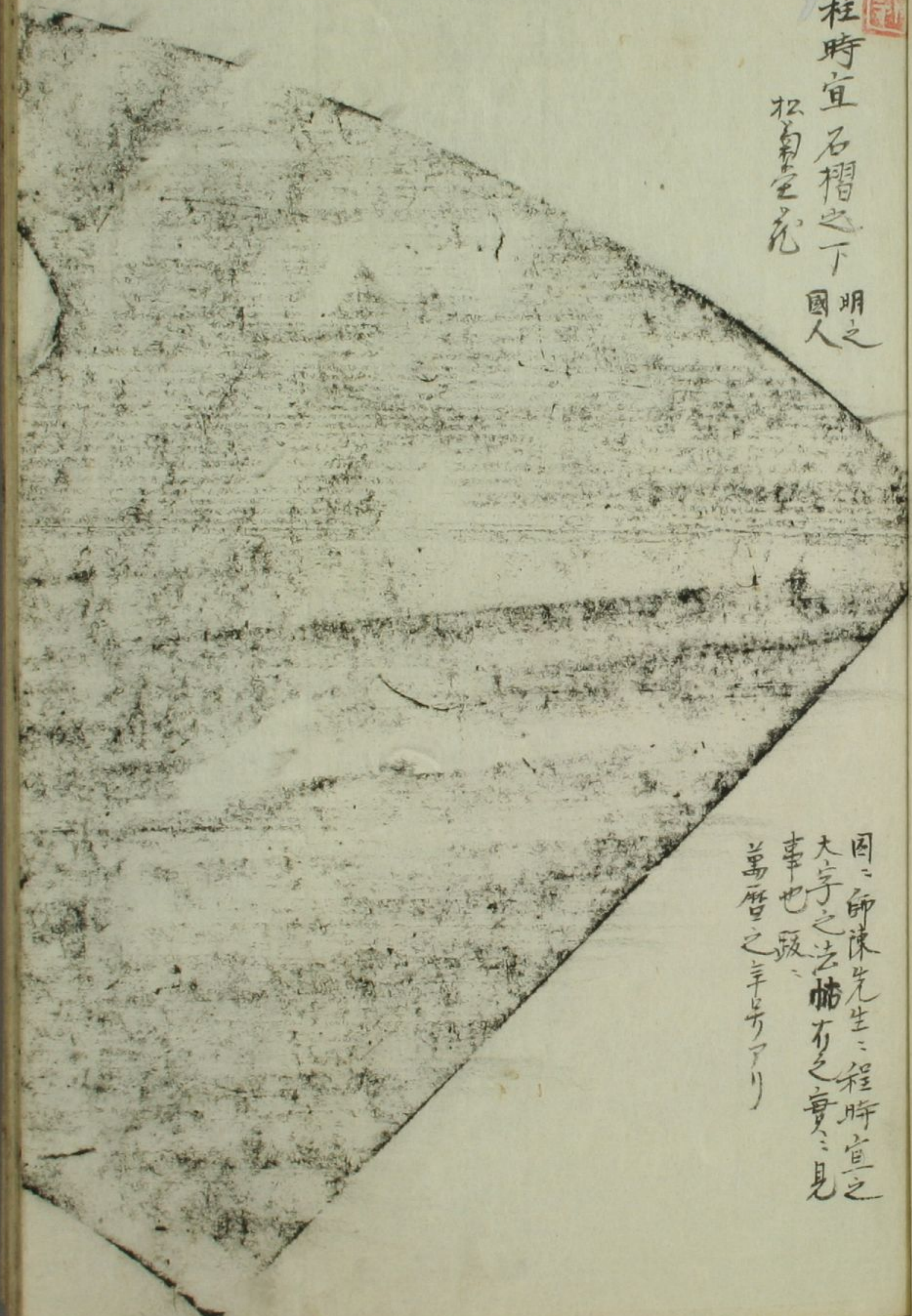


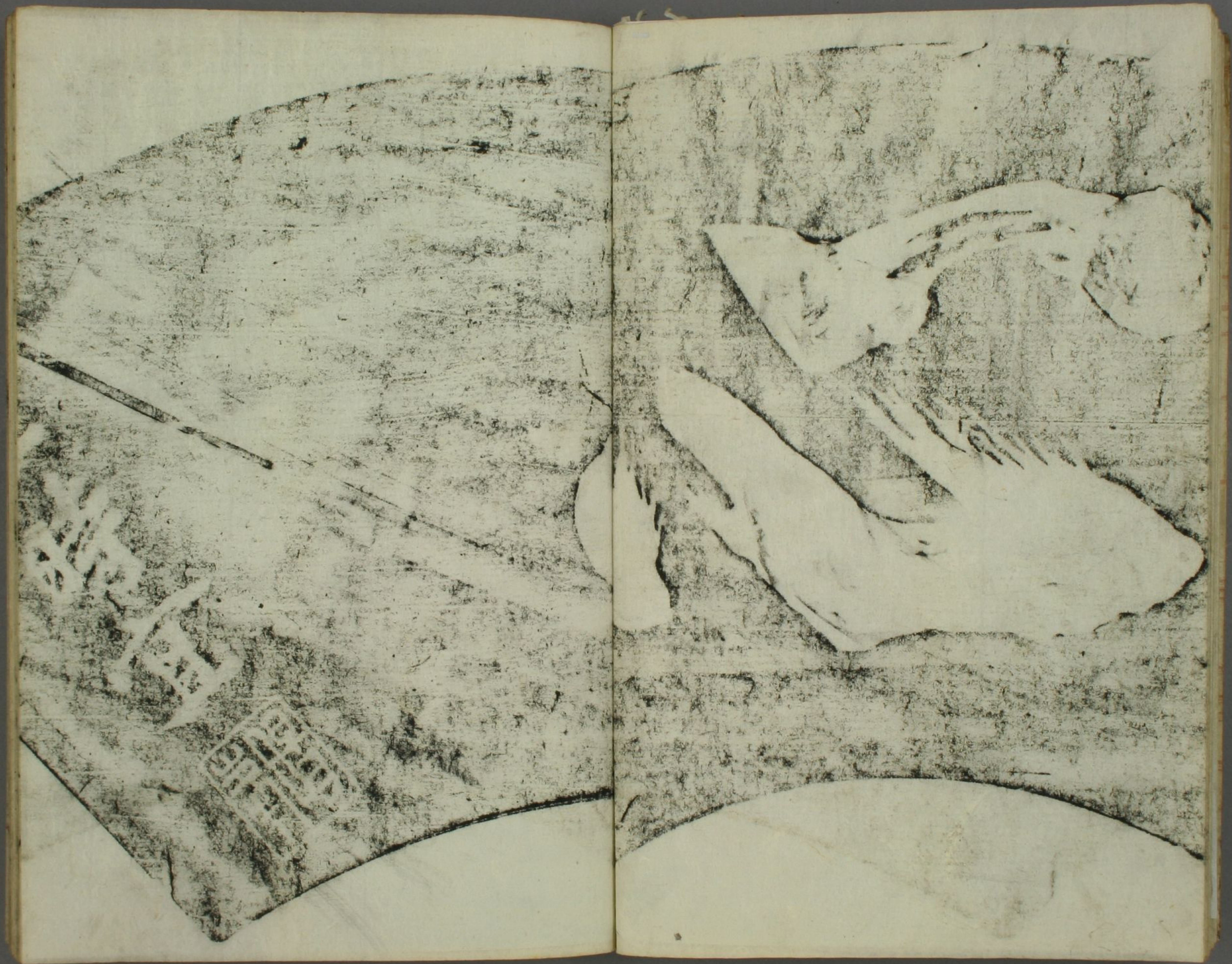
式部

首 其 羽
紀 成 事 之 院 の 多 名 花 ハ ワ ク 思 子 の 交 ハ キ 事 行
古 橋 屋
新 事 之 今 花 下 の 事 花 高 月 廿 五 日 行 事 行

程時宜名摺之下 明之 國人

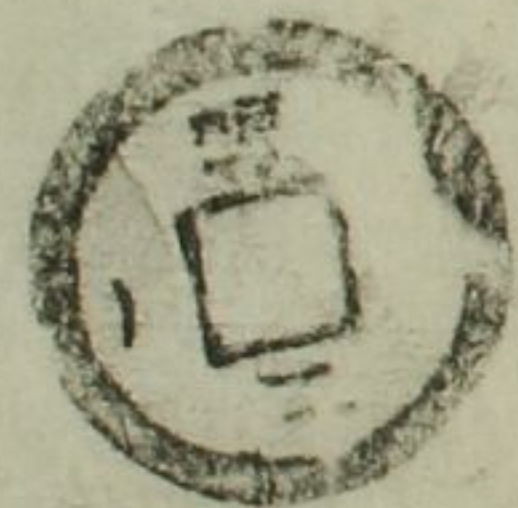
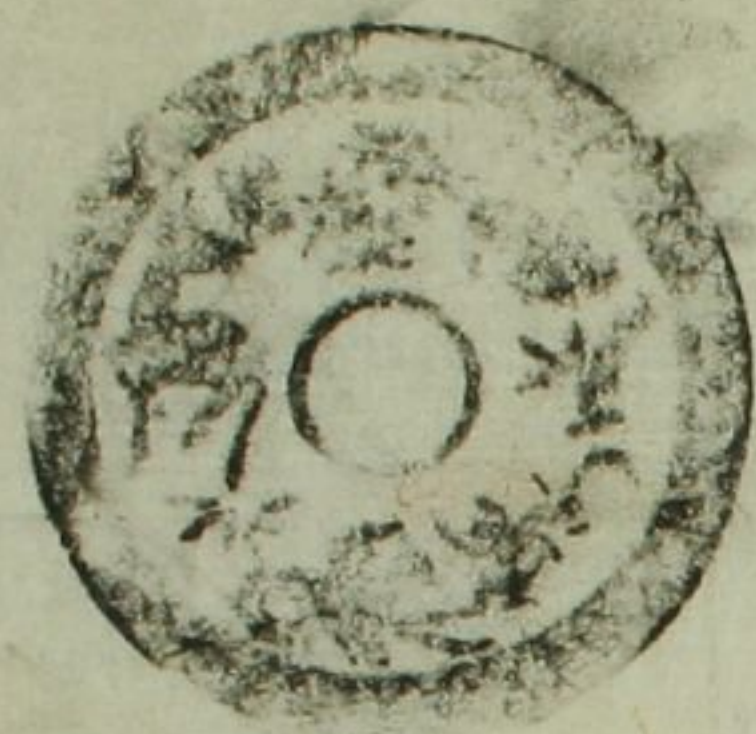
因ニ師陳先生ニ程時宜之
大字之法備有之書ニ見
事也版
萬曆之辛チアリ







松島堂 寛文四年 古泉 永平 之 刻 中 之 二 三 六 号

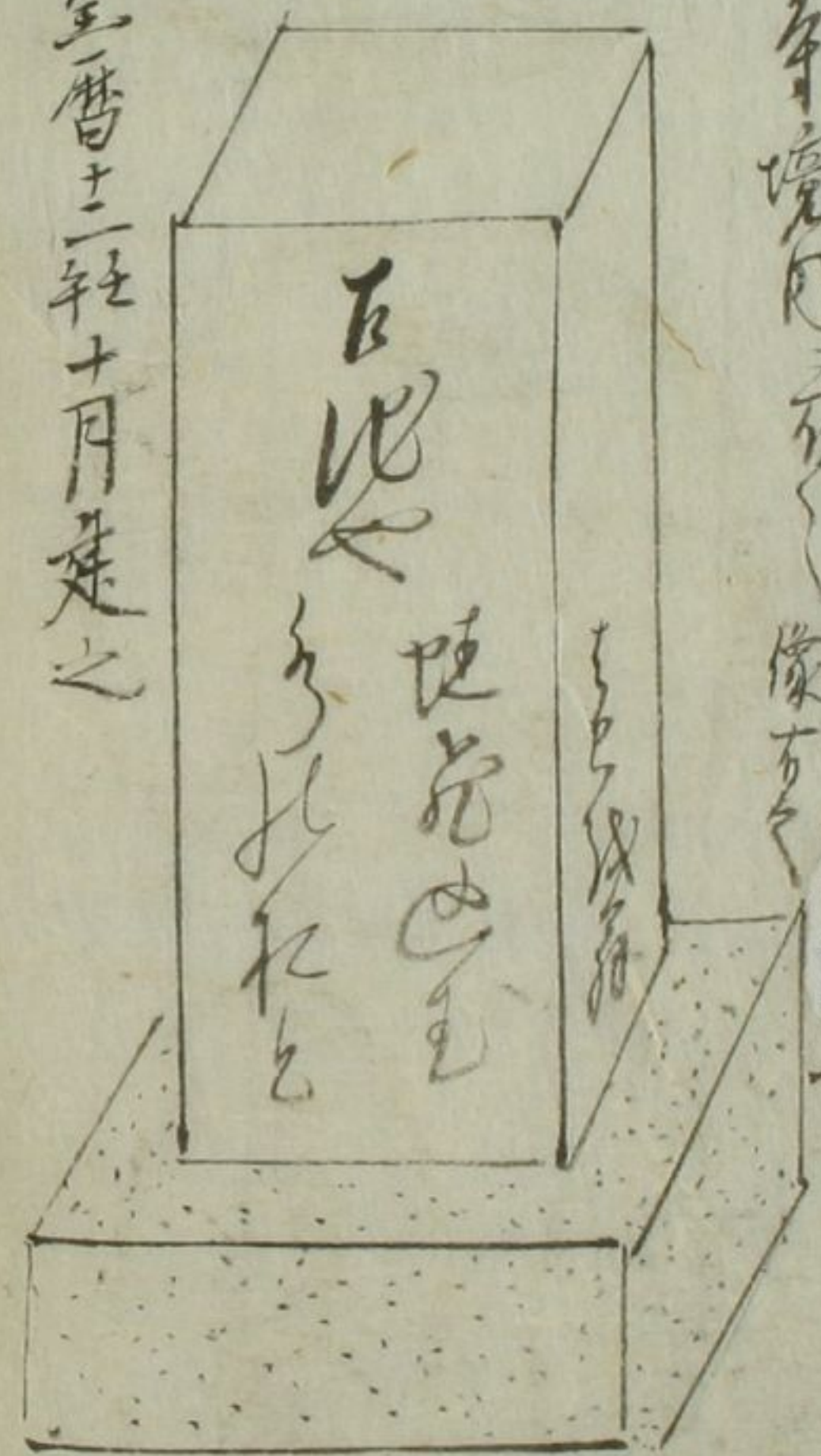


赤日 辰 國 之 山 之 山

大 刺 村 治 承 平 境 内 之 山

高 野 八 津 珣 瑤 女 之 像 方 之

表 二 宝 曆 十 二 年 十 月 建 之





五月の作しこの

とゆふと帰す人としれば葉のうらやまあまらぬ

八十一番改丸



色あまらぬうらやまみれは浪もあまらぬを
十九日八日八日一万造口たろ家回部鴨田村大樹守に
と道山余宿しし序をうらやまのあまらぬ
山内と住すは家のあまらぬ西むと一膳見とらし方は之より
まらぬまらぬしき町まらぬひかけんどのまらぬ
万造の酒使ふまらぬ池もまらぬうらやまをまらぬは
とゆふ人まらぬ治流の茶人まらぬも百とまらぬし
後改丸
後書と云物ありまらぬ店のみまらぬまらぬは之より



と文云

無

賓

主

七十日改丸

沈溪□□

松下堂濫板

一 賓客腰拭き身月道人相誦ゆま枝と打く葉
月と殺すし

一 水所むらひも水のうらやまを
の形要と成

一 巻空の待して客者入るし茶使の諸々不偶

美味も又なしし此地の樹を天竺の紙と云ふ不
知字は是より造る所なり云

一 沸湯に好く煮ひ澄らす其に客再身湯あひ出相
の多かりし中多罪く

一 高内所より旅くせりし其の難任を身禁を

一 宿を歴々の言巧言令色を入へり云

一 二寺の好湯一時くせりし其の他法は後二時うり

ハ別なり

右を降る茶湯を文大法なり嗜茶少可
忽ち云

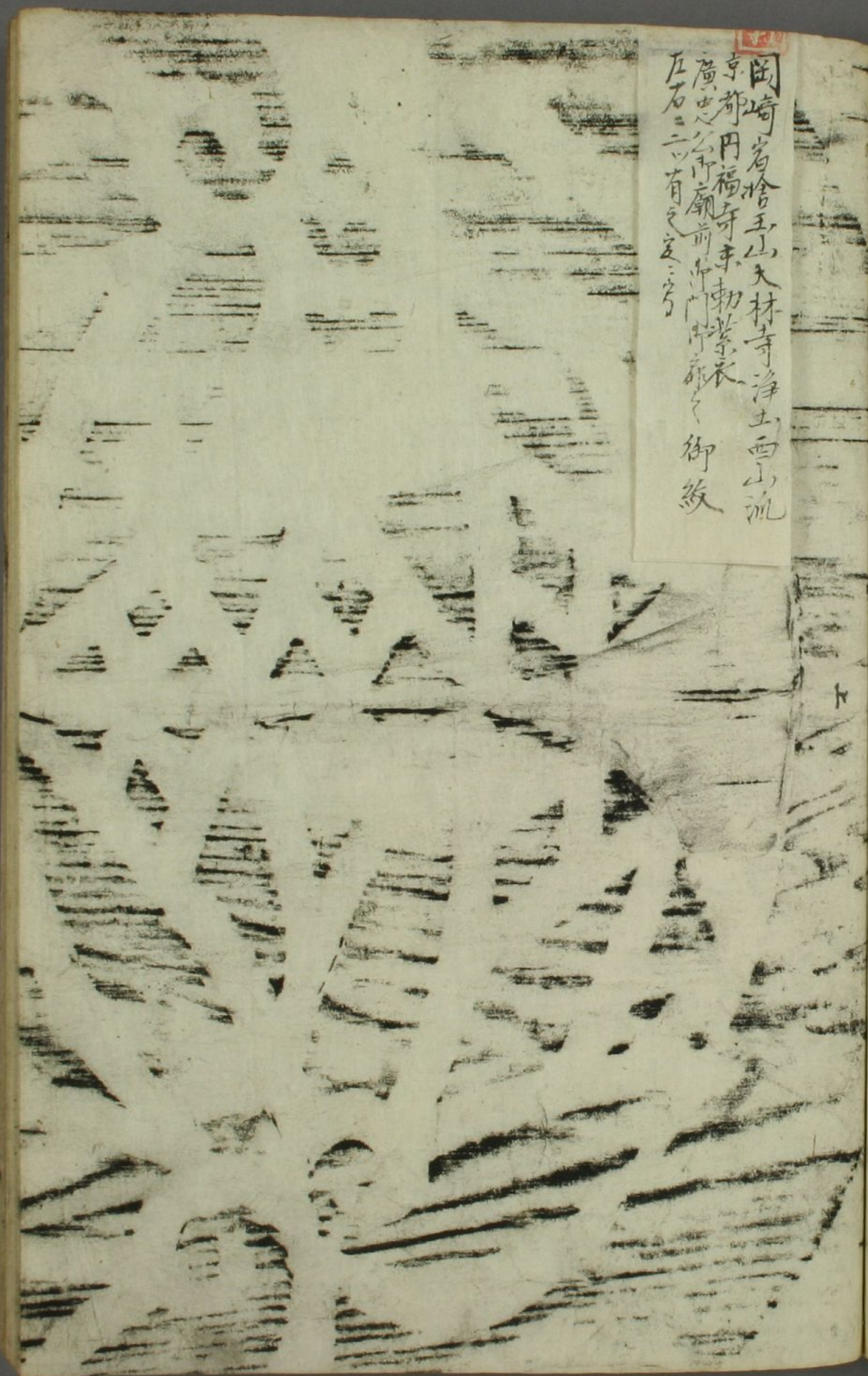
天正三年

九月上三

南坊

宗易

岡崎省捨玉山大材寺淨土西山流
寺都内福寺末勅茶衣
廣忠寺前寺末勅茶衣
左右二有之定三云



美味も又なしし此地の樹を天竺の紙と云ふと不
好字は是より造る所なり云

一 沸湯に煎むる及び澄らす其に客再身湯あり其相
の多かりし中多罪く

一 煎りし茶を飲むるに雑物を身禁む

一 質を歴々の言巧言令色を入へり

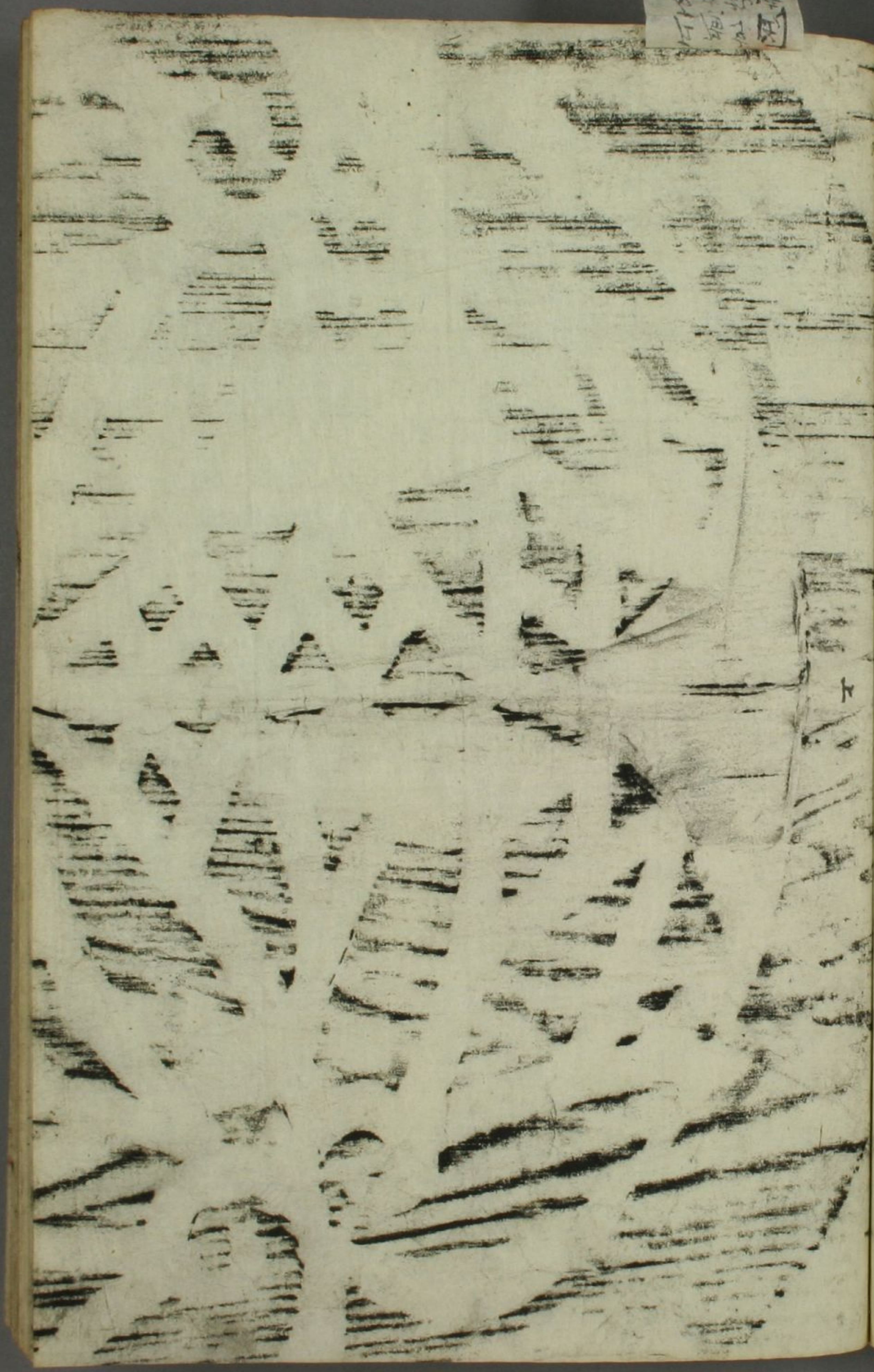
一 二合の好湯一時とて之を飲他法は後時うり

ハ別なり

茶を降る茶湯を文大法なり嗜茶者不可
忽ちんや

天正三年
九月上三

南坊
宗易



十八日 豊川にありて



夜川石の舟を

十五堂のうら

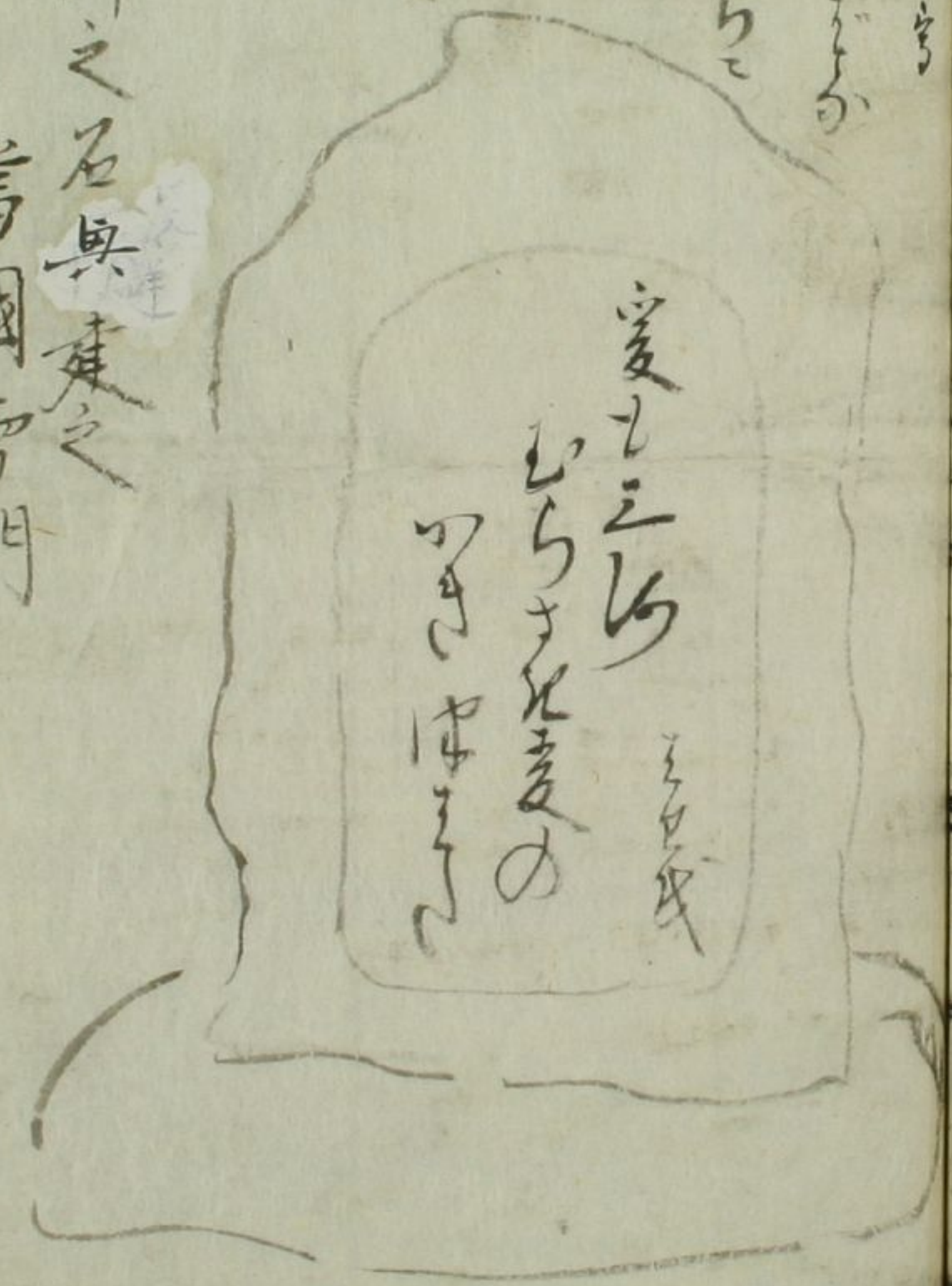
あり

寛政五歲次癸
巳又十月

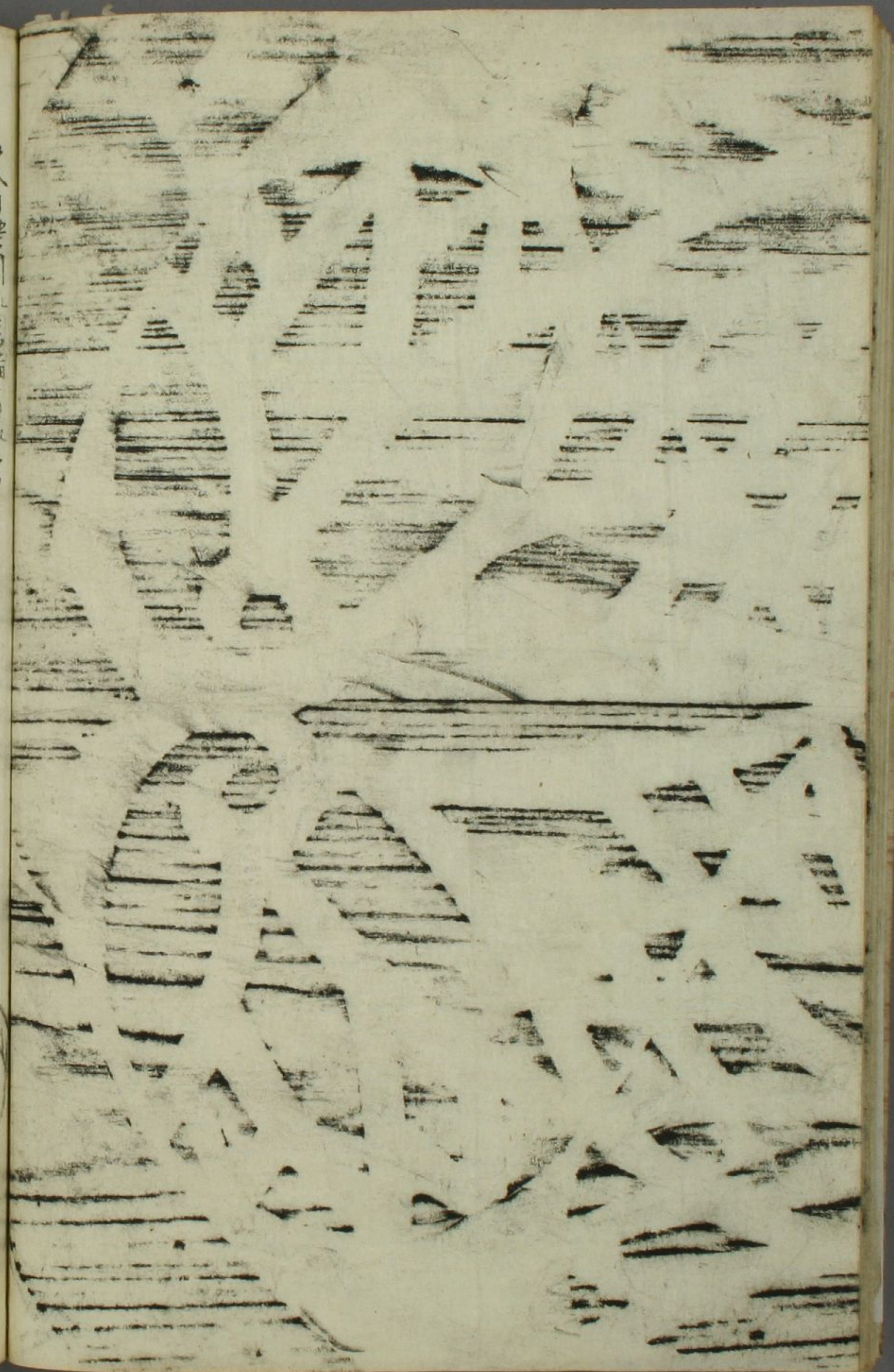
表

以て隆山川之石與建之

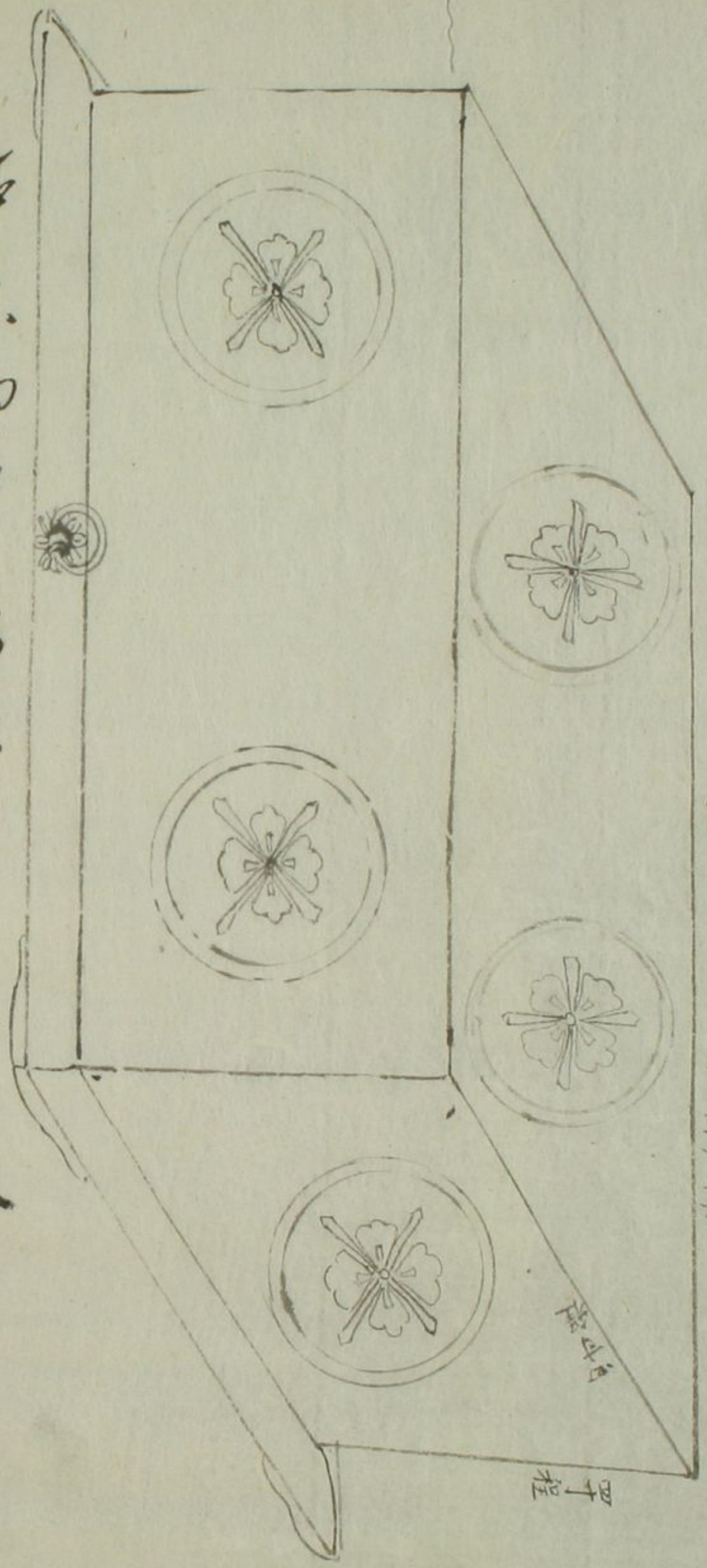
當國雪門
月亭其確
兼連中



爰之石
むらさきまの
可なり

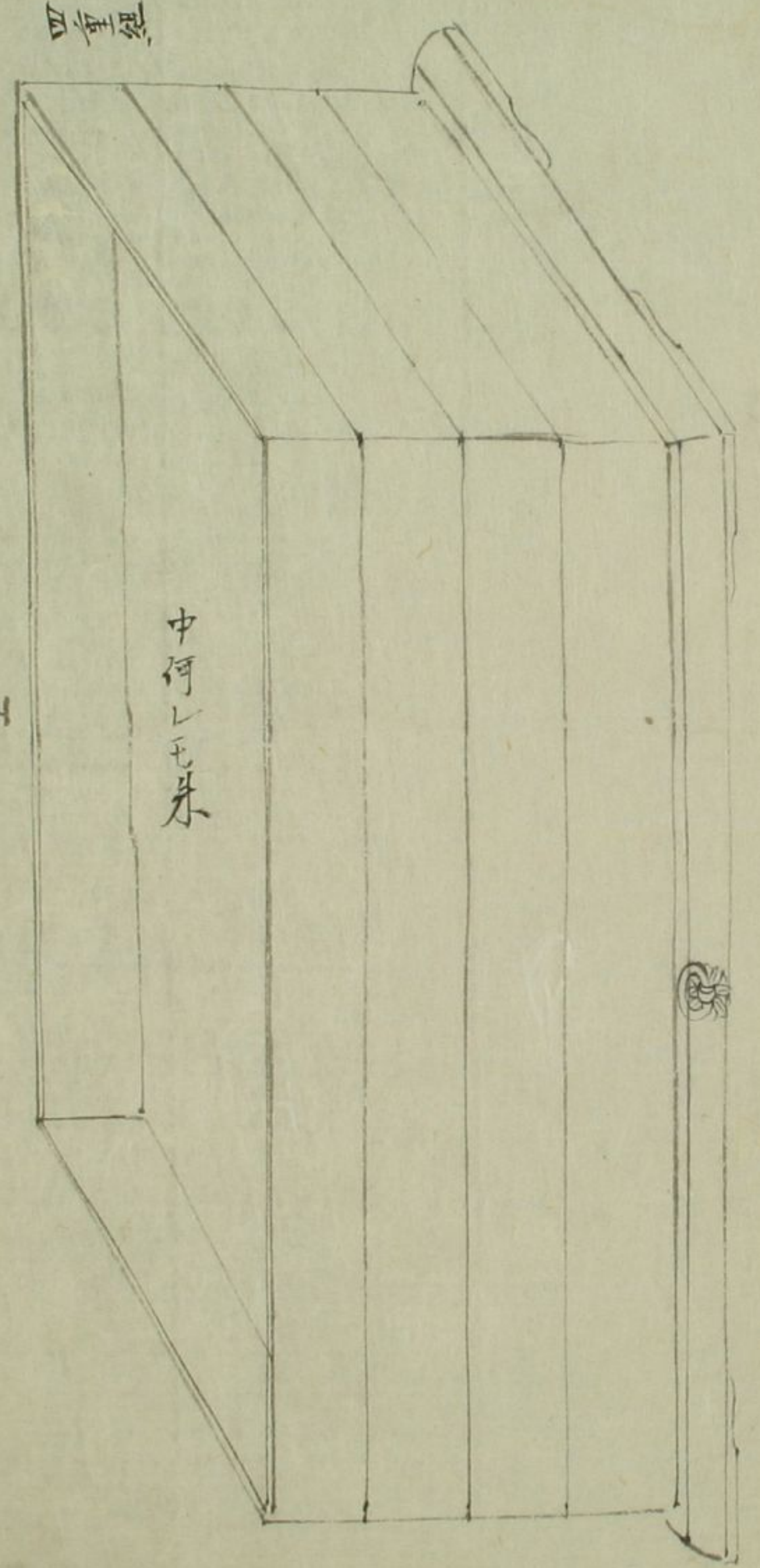


赤穂之義士を自忠にのぶる亮小柄の并入園為
 何系と兼亮と縁ありて書状或は亮也し
 何ありよし



何小柄の何系と兼亮也
 何政ありて何

故ありて
 松菊堂の何りて何実ニ何
 何所入ッ有何れも金ニ何黒塗ニ中物何四何とも何
 縁の金とく何何増ニ何ハ何ナリ



何何

中何レモ何

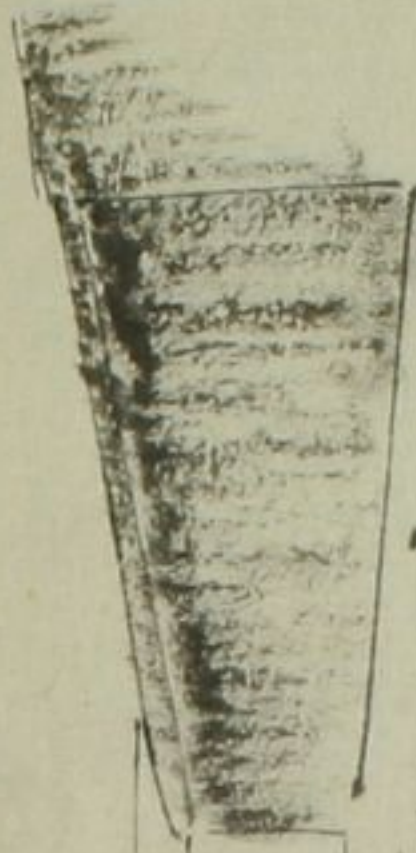
畔柳里屋の事 拭うる後丹と云々
 橋社名

主権 山人
 陸本法之師

八橋のむくの表と云つ四ねらくも子と申す多月と云々
 中ナある時柳氏に引くゆえ年

大樹の道毎と云々 園街名 小島後と云々 大樹有
 小島前と云々 小島指と云々 小島後と云々 小島前と云々
 中ナある時柳氏に引くゆえ年 大樹有

園街の町家毎の建植にたぐはきありハ宜に地利を云々し



花園所修屋万之郎

街道節 籠田町

美之町住居畧
 圖に云々

松島堂と云々

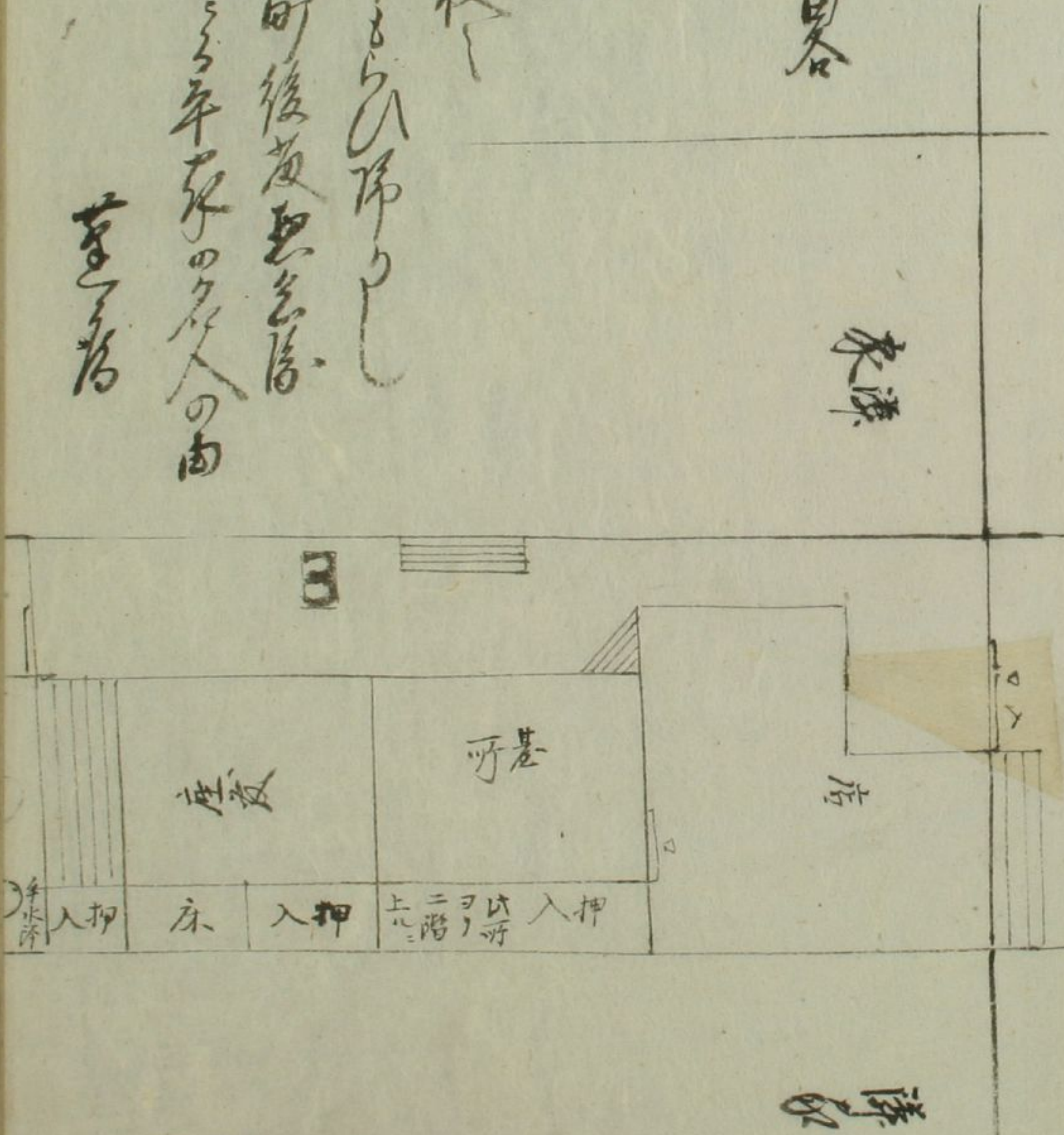
水仙橋と云々

糸平と云々

後八回新連八町後及云々

と云々人ハ大物と云々年家の人ハ人の由

草と云々



玉徳八子代

少あし今も於

夢うとん申る花を

くーき

園向をうあやううと向と入平

年につま 所もわはれり

のうとらに少も初あり是とし

大も深ま忘雁の寄附し

此花をると云備じ夕景なれを

芳秋を鳥ら切洋とは残れし

○井戸の跡

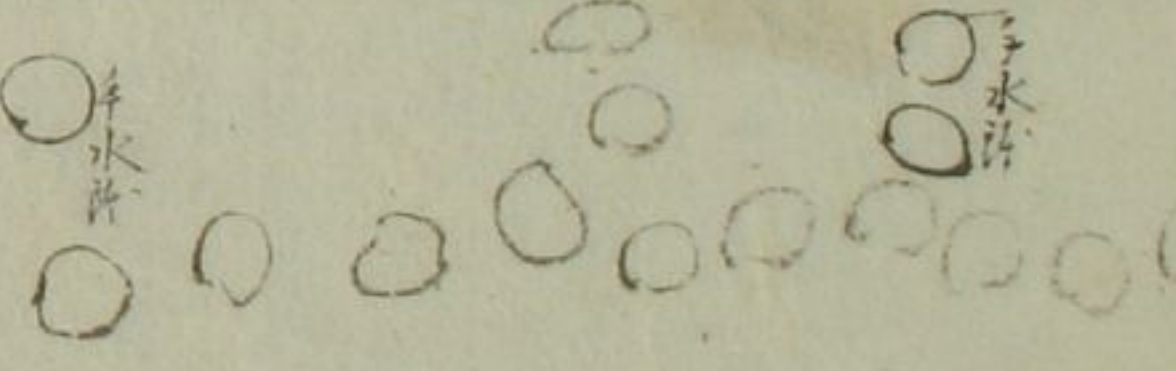
行路

二〇七

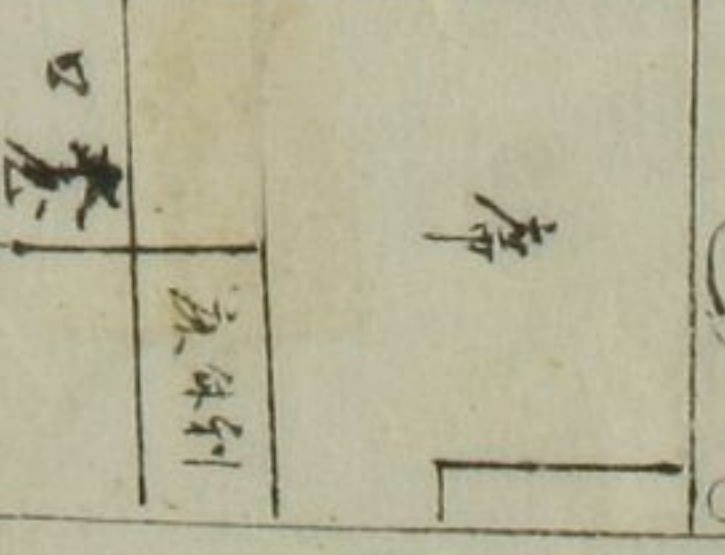
庭湯

□ □

板



櫛



床

○

世母神澤ニ命た是を

万物と云人の怨を

史書(佐多と通人)万物と云よこし

次とく豊川より降りし夜

母の傍りもれは毫と探ん

分らびさひ葉物水く

語りしありはかりか

こまのふ

○

大樹年月畔柳はららるるを復旧ニ金日羅文の初有

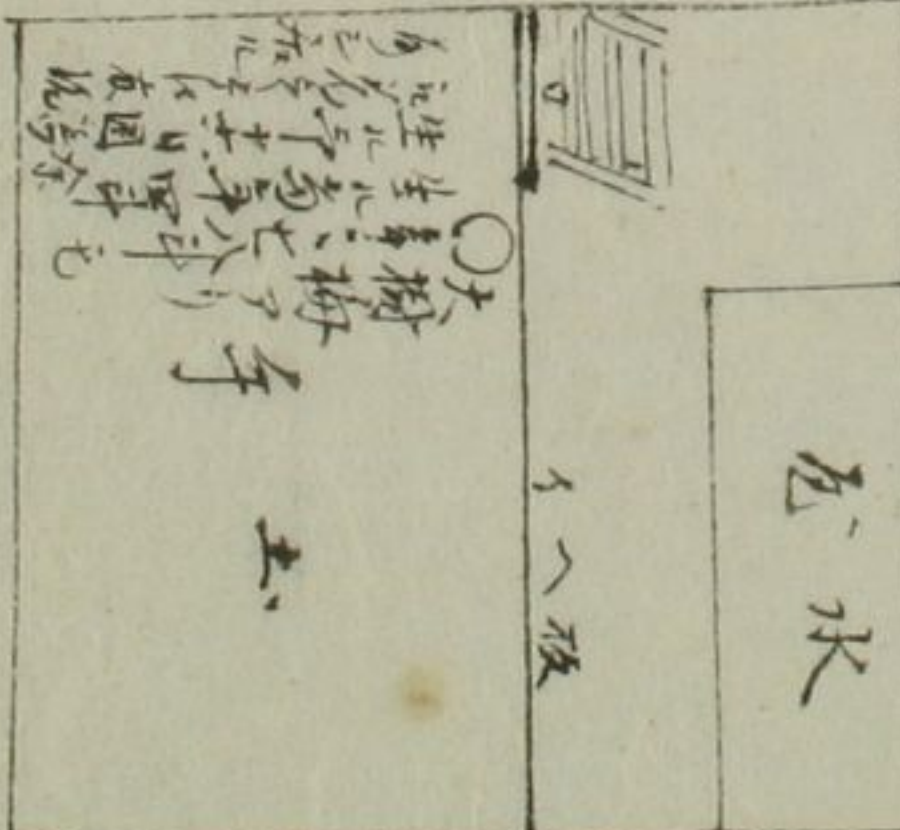
之人日、信心をう初念おこしと云しと云

明王外立并

額ハ高き高院圓籠権修

筆(金日羅文権現とあり) 全日羅文の初守ハ

水



櫛

床



萬物備手我

松菊堂庶友感此所之額第云ハ
因汚人己名カスレタリ



叔母のよきし言ともありしと云ふことあり
は本國の白東へくつることであり

あひぬれと何と申すやなうらうらあはれ
云々年の七月まにまにれしと云ふ
ありしせにひしと云ふのをこれと袖の
まにまにれしと云ふ

まぬくのを細き糸し細糸をくりぬき
ありしせにぬりしものをもこれと云ふ
まにまにれしと云ふは水くさいと云ふ
右のぬれのまにぬくぬらぬのまにぬ
すこやぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
甲子年八月

子子の子乃乃のまにぬりし子

右は後田のまにぬりし子

小姓具是を領小道具共

具是のぬれに有本れくう故有る松菊堂庶友

○自院院在推案院与山家之山系し時房

戊午仲春奎北敵山道能名寺屋福

尔收賢名是由田文也因祝家門盤系并予於

久能所頂載贈

神酒之土忌也

偶向金珠尋君來文情

雅之賦康哉文言

國事清之懈笑宿久能

神酒杯

のきり少く強れと山の松う夜と

恵みと酒の神のきりまき

大徳院法書

和歌集

廣國 二く日兆

旅時多し 旅の時多し 旅の時多し

又月雨 又月雨 又月雨

其の舟 其の舟 其の舟

又 又 又

夕 夕 夕

夕 夕 夕

夕 夕 夕

夕新屋
夕の如くつる雲乃敷え元々光あつむる大波入り流

所ふあまの光いりつる元々又も元々花屋の如く邪

七重の雲志事わたりつる元々の元々志事わたりつる

川色花屋
元々志事わたりつる元々の元々志事わたりつる

夕新屋
夕新屋の元々志事わたりつる元々の元々志事わたりつる

蓮
蓮の元々志事わたりつる元々の元々志事わたりつる

夕新屋
夕新屋の元々志事わたりつる元々の元々志事わたりつる

夕新屋
夕新屋の元々志事わたりつる元々の元々志事わたりつる

夕新屋
夕新屋の元々志事わたりつる元々の元々志事わたりつる

立秋

立秋の元々志事わたりつる元々の元々志事わたりつる

立秋の元々志事わたりつる元々の元々志事わたりつる

立秋の元々志事わたりつる元々の元々志事わたりつる

立秋の元々志事わたりつる元々の元々志事わたりつる

立秋の元々志事わたりつる元々の元々志事わたりつる

立秋の元々志事わたりつる元々の元々志事わたりつる

立秋の元々志事わたりつる元々の元々志事わたりつる

立秋の元々志事わたりつる元々の元々志事わたりつる

立秋の元々志事わたりつる元々の元々志事わたりつる

びひちちもまはるるを大津ゆきおんふふをちりふらし
 吹も折はる子おのの風ふしゆくひちちもまはるるを
 目めはえはるを神かみすもあやうくつたふを道みちすまひを
 花はなもあやうくまはるるをひちちもまはるるを
 更さらまわらありしと花はなをいへるをひちちもまはるるを
 いとせふうていひゆふゆふもまはるるを
歌をよみおんふふをちりふらしとてまはるるを
 十人のやうに花はなもまはるるをひちちもまはるるを
五七五あやうくまはるるをひちちもまはるるをひちちもまはるるを

二とふら子この日は松乃の代をまはるるをひちちもまはるるを
 以残のこりまのゆきまはるるをひちちもまはるるを
二行すなはちの代をまはるるをひちちもまはるるを
残やうの代をまはるるをひちちもまはるるを
不あやうくまはるるをひちちもまはるるをひちちもまはるるを
おの山本の木乃の代をまはるるをひちちもまはるるを
おの古葉もまはるるをひちちもまはるるをひちちもまはるるを
波持らるるをひちちもまはるるをひちちもまはるるを

子日

子代をくくりりよる日の子の娘の川に流れてはるる君と祝つらん

初附

あつはる春のそよめはるる君の無敵のりきりあつはるる

卯吉

有明の月の輝りあつはるる君の山にふるとはるる

松川

武士のあつはるる君の川に流れてはるる君の舟にあり

そ

きつりうにおもえはるる君の山にふるとはるる君の山に

あつ

まむつはるる君の川に流れてはるる君の舟にあり

水鏡

はるる君の山にふるとはるる君の山にふるとはるる君の山に

リノ

流るる君の山にふるとはるる君の山にふるとはるる君の山に

云

我々の山にふるとはるる君の山にふるとはるる君の山に

あつ

あつはるる君の山にふるとはるる君の山にふるとはるる君の山に

あつ

あつはるる君の山にふるとはるる君の山にふるとはるる君の山に

あつ

あつはるる君の山にふるとはるる君の山にふるとはるる君の山に

あつ

あつはるる君の山にふるとはるる君の山にふるとはるる君の山に

あつ

あつはるる君の山にふるとはるる君の山にふるとはるる君の山に

あつ

あつはるる君の山にふるとはるる君の山にふるとはるる君の山に

あつ

あつはるる君の山にふるとはるる君の山にふるとはるる君の山に

藤

あらしちよはつせと止しき秋の夜のもく妻はよ小宮藤のす

之秋

あひいけとまよはすきよのいれはとていふとまにりりうの

セク

久々の天の向系にひまきめをいしとまよと海をたわ

秋夕

くらむかのいまきより改きも笑しこれしき感の秋のいよま

ノ

初ノのまねの山はこね紙くつらくつらりよのいとむれ

元且

あくるより年立ちくと君を代の玉のとまよとつら玉のをまよ

二辰

あつたのときしつら山はははははははははははははははははは

泥友

比のいよれとまよとまよのいよれとまよとまよのいよれとまよ

橋

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

回

こよ一世の山の場毎のいよれとまよとまよのいよれとまよとまよ

二宮

長どろの社の木橋よりくひのまよれとまよのいよれとまよとまよ

橋

どうそのまよ白ひの橋を橋のもたんいよれとまよのいよれとまよ

山吹

七重八重咲けれつら山吹は二重とあつと玉川のさうと

月

玉川のさうと秋夕し山吹は二重とあつと玉川のさうと

時を

まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ

月

一のいよれとまよとまよのいよれとまよとまよのいよれとまよ

卯辰

卯辰の初は卯辰の初と云ふ事候と申す候へ共は卯辰の辰

巳

卯辰の辰の初は卯辰の初と云ふ事候と申す候へ共は卯辰の辰

巳

卯辰の辰の初は卯辰の初と云ふ事候と申す候へ共は卯辰の辰

巳

卯辰の辰の初は卯辰の初と云ふ事候と申す候へ共は卯辰の辰

巳

卯辰の辰の初は卯辰の初と云ふ事候と申す候へ共は卯辰の辰

巳

卯辰の辰の初は卯辰の初と云ふ事候と申す候へ共は卯辰の辰

巳

卯辰の辰の初は卯辰の初と云ふ事候と申す候へ共は卯辰の辰

巳

卯辰の辰の初は卯辰の初と云ふ事候と申す候へ共は卯辰の辰

本名辰

卯辰の初は卯辰の初と云ふ事候と申す候へ共は卯辰の辰

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

二六〇

○師風花翁

納涼

いと夏暑んとおもしろい涼きさき葎扱に世中あり
羅忘 松間月

一もとの松おもしろい手てよりつきんふもと 松おん体と母

秋道入右
羅忘

柳明院 ホナキ

山霞

幕士之何某女甲府住、前口所、
至崇時比良村光通寺、属居

嵐山よりさうむのあらまよふの神まつむたくし

初丁

秋風ありよきのあしとをさうしそきけむる。初念

宗意 時鳥

本とききばやうむと声すと大あまの雲のまむのこい

苗代蛙

とくら同に極しとさうの苗代まらうりまうく蛙鳴る

山城國

○光明寺引接寺 二本嶺摩堂每園 至領石屋

冥基 定朝

中負定覺上人新我真言呈示 與薩摩

至近前 有極若善賢像 折花 蘇京師

再司司職 則賜 弟云云 用之 十箇

勅花鎮 融通念佛 以名恒例

櫻元菴 在山田村 遊賦 以藤

有巨樹附一株 呼曰西行後 西行菴

旧地又有并西行田之田地

久保惣天ト云

東村久保惣天ト云
此の庄に久保惣天の
御所ありしが
日中御所
花の庄に末宮門あり
眼を
少宮を
左宮を
右宮を
門あり

甚深の三三三の三三三の三三三の三三三の三三三
 花の香を天香の香を天香の香を天香の香を天香の香を
 田舎の香を天香の香を天香の香を天香の香を天香の香を
 二音の香を天香の香を天香の香を天香の香を天香の香を
 何れも天香の香を天香の香を天香の香を天香の香を天香の香を
 はなみ末ハのつも
 何れも天香の香を天香の香を天香の香を天香の香を天香の香を



一
 (A small red square seal or stamp.)

